

[B年] 公現後第2主日(2022年1月16日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 1章4～10節**

4主の言葉がわたしに臨んだ。

5「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」

6わたしは言った。
「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」

7しかし、主はわたしに言われた。
「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。」

8彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」と主は言われた。

9主は手を伸ばして、わたしの口に触れ、主はわたしに言われた。

「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。」

10見よ、今日、あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために。」

【使徒書日課】 使徒言行録 9章1～20節

1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。5「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」7同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。8サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。

9サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。10ところで、ダマスコにアナニアという

弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。11すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。12アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」13しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」15すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。16わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」17そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」18すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、20すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

【福音書日課】 マルコによる福音書 1章14～20節

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

16イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18二人はすぐに網を捨てて従った。19また、少し進んで、ゼベグイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、20すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベグイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 1章4～10節

- 4 主の言葉が私に臨んだ。
 5 「私はあなたを胎内に形づくる前から
 知っていた。
 母の胎より生まれ出る前に
 あなたを聖別していた。
 諸国民の預言者としたのだ。」
 6 そこで私は言った。
 「ああ、わが主なる神よ
 私はまだ若く
 どう語ればよいの分かりません。」
 7 しかし、主は言われた。
 「『まだ若い』と言ってはならない。
 むしろ、私があなたを遣わす相手が誰であろうと
 赴いて、命じることをすべて語れ。」
 8 彼らを恐れてはならない。
 この私があなたと共にいて、救い出すからだ」
 ——主の仰せ。
 9 御手を伸ばし、私の口に触れ
 主は言われた。
 「さあ、私はあなたの口に私の言葉を授けた。」
 10 見よ、今日、あなたを
 諸国民、諸王国の上に任命する。
 引き抜き、壊し、滅ぼし、破壊し
 あるいは建て、植えるために。」

使徒言行録 9章1～20節

- 1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、
 殺害しようと意気込んで、大祭司のところへ行き、
 2ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、
 この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず
 縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。
 3ところが、旅の途中、ダマスコに近づいたとき、
 突然、天からの光が彼の周りを照らした。4サウロ
 は地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害
 するのか」と語りかける声を聞いた。5「主よ、あ
 なたはどなたですか」と言うと、答えがあった。
 「私は、あなたが迫害しているイエスである。6立
 ち上がって町に入れ。そうすれば、あなたのなす
 べきことが告げられる。7同行していた人たちは、
 声は聞こえても、誰の姿も見えないので、ものも
 言えず立っていた。8サウロは地面から起き上がっ
 て、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼
 の手を引いてダマスコに連れて行った。9サウロは
 三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

10ところで、ダマスコにアナニアという弟子が
 いた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、
 アナニアは、「主よ、ここにおります」と言
 った。11すると、主は言われた。「立って、『まっ
 すぐ』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサ
 ウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。彼
 は今祈っている。12アナニアと言う人が入って来
 て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるよう
 にしてくれるのを、幻で見たのだ。」13しかし、ア
 ナニアは答えた。「主よ、私は、その男がエルサ
 レムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪
 事を働いたか、大勢の人から聞きました。14ここ
 でも、御名を呼び求める人をすべて縛り上げる顕
 現を、祭司長から受けています。」15すると、主は言
 われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、ま
 たイスラエルの子らの前に私の名を運ぶために、
 私が選んだ器である。16私の名のためにどんなに
 苦しまなくてはならないかを、彼に知らせよう。」
 17そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家
 に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サ
 ウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださ
 った主イエスは、あなたが元どおり目が見えるよう
 になり、また、聖霊で満たされるようにと、私を
 お遣わしになったのです。」18すると、たちまち目
 からうろこのようなものが落ち、サウロは元ど
 おり見えるようになった。そこで、身を起こして洗
 礼を受け、19食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒に
 いて、20すぐ諸会堂で、「この人こそ神の子であ
 る」と、イエスのことを宣べ伝えた。

マルコによる福音書 1章14～20節

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤ
 へ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神
 の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」
 と言われた。

16イエスは、ガリラヤ湖のほとりを通っていた
 とき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を
 打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。
 17イエスは、「私について来なさい。人間をとる漁
 師にしよう」と言われた。18二人はすぐに網を捨て
 て従った。19また、少し進んで、ゼベダイの子ヤ
 コブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れを
 しているのを御覧になると、20すぐに彼らをお呼
 びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人
 たちと一緒に舟に残して、イエスの後に付いて行
 った。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・1月16日「公現後第2主日」の日課主題は「最初の弟子たち」。「公現後」の期節は、主イエスの公生涯の中から主要な出来事が主題として取り上げられる。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、預言者エレミヤの召命を描く箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、教会の迫害者であったサウロ＝パウロが教会に加わり宣教者に変えられたことを物語る箇所。福音書日課は、4人の漁師が主イエスの呼びかけに応じて弟子として従ったことを伝える箇所。

旧約日課(エレミヤ1章より)

・「エレミヤ書」は、ヘブライ語正典「後の預言者」の第二書。歴史的預言者エレミヤの預言集と預言活動の伝承として編纂されている。歴史的預言者エレミヤは、前7世紀後半、アッシリア帝国が衰退する時代に南王国ヨシヤ王のもとで進められた国政改革の担い手の一人として登用された地方聖所出身の祭司で、ヨシヤ王没後もバビロニア帝国の侵攻によってエルサレムが陥落し、南王国が滅亡するまで、エルサレムで預言活動が続けた。王国滅亡後は、エジプト亡命組のユダヤ人に強いられる形でエジプトに移住し、同地で生涯を終えたと考えられる。エレミヤは、ベニヤミン領アナトを拠点とする地方祭司の出自であるが、ヨシヤ王のもとで行われた改革で祭司権力が中央聖所・エルサレム神殿へ集約される中、エルサレム祭司団に参画したと考えられる。このヨシヤ王のもとの改革を進めたエルサレム祭司団グループは、王と共に親バビロニア派であったが、ヨシヤ王がエジプト軍との戦闘で戦死後、南王国宮廷は、親エジプト派と親バビロニア派の権力闘争の場となったと考えられる。新バビロニア派であったエレミヤは、親エジプト派からの攻撃を受け続けたが、最後まで宮廷預言者としての地位を維持していたとみられ、宮廷書記官バルクがエレミヤの預言集と預言活動を記録として残した。エレミヤらの祭司・預言者グループは、自分たちの政治的立ち位置のルーツを預言者イザヤに求めた一方、王国滅亡後も、その伝統を継承して真のイスラエルを再興させるビジョンを醸成、バビロン捕囚後のエルサレム神殿再建から始まるユダヤ宗教共同体の再興において重要な役割を果たしたと考えられる。その成果物は、正典「律法と預言者」の編纂であり、これに基づいたユダヤ宗教共同体の礎を築くこととなった。

・日課箇所は、エレミヤが預言者としての召命を受けたことを述べる記事。預言者の召命記事は、「イザヤ書」(6章)や「エゼキエル書」(1~2章)、あるいは「サムエル記上」(3章)にも例がある。いずれも、神の言葉を語るのにふさわしくない者が敢えて神に指名されてその務めを担わされることとして描かれている。個々の召命の固有性以上に、この定型性こそが、預言者集団の伝統を形成していると考えられる。

使徒書日課(使徒9章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」で、昇天される主イエスから継承した教えと実践を担う「弟子たちの教会」が、エルサレムからいかにして世界に拡大したかを描いている。「ルカ・使徒言行録」は、紀元1世紀終わりごろ、すでに教会メンバーが第三世代に置き換わり始めていた時代に編纂されたと考えられる。すなわち、世界各地に共同体を創設してきた教会は、主イエスから直接指導を受けた「使徒」たち自身の権威によらず、また「使徒」たちから直接指導を受けた者(パウロら第二世代)の権威にもよらず、彼らから受け継いだとされる教えと実践に基づいて共同体形成に取り組まなければならない時代を迎えていた。一つの時代状況として、ユダヤ戦争(66~70年)の結果としてエルサレム神殿は失われ、ユダヤ人社会の制度的骨格が壊滅した結果、ユダヤ教共同体の内部に自己規定を明確化する動きが起こり、ファリサイ派系の「ラビ的ユダヤ教」が主流派として後世に「ユダヤ教」として継承されることになる一方、彼ら「ラビ的ユダヤ教」から排除された傍流の諸「ユダヤ教」グループもそれぞれに新たな自己規定を迫られることになった。「キリスト教徒」が「ユダヤ会堂」から排除されるようになったのは、まさにこの時代で、「キリスト教徒」らは、自分たちこそ正当な「ユダヤ教」の継承者であるという自認のもと、「キリスト教会」としての自己規定を進めることになった。このような時代状況の要請を受けて、「ルカ福音書」および「使徒言行録」の「初代教会正史物語」は、他の新約文書以上に、自分たち「キリスト教会」が旧約ユダヤ教をルーツとした教えと実践に生きていることをはっきり示すことを意図して編集されたのである。この際、ユダヤ人社会の制度的支柱であった「エルサレム神殿」が失われたのと軌を一にして、「キリスト教会」もその第一世代によって形成された「エルサレム教会」を失っていた。しかし、「パウロ書簡」からも推察されるように、第一世代および第二世代の時代にすでに、「エルサレム教会」と、世界各地に展開し異邦人を取り込んでいた「諸教会」との間には、深刻な対立や葛藤が生じていた。ペトロやパウロは、それらの対立を克服するために奔走したと考えられるが、「諸教会」にとっては「エルサレム教会」はお荷物と見られ兼ねない存在になっていたと考えられ、ユダヤ戦争で「エルサレム教会」が失われたことは、実際には「諸教会」にとってほとんど影響を及ぼすものではなかったと見られる。にもかかわらず、ペトロやパウロが取り組んだ両者の対立克服への取り組みは、彼ら「諸教会」のルーツを明確にし、その存在の根拠を確立する上で避けて通れない事象であったと、「使徒言行録」著者は理解し、このことを本書の構成枠組みに置いたのである。サウロ(パウロ)は、この「エルサレム教会」と「諸教会」の一致を描く上で、欠かすことのできない人物である。

・日課箇所は、サウロ(パウロ)の回心の記事と呼ばれる箇所。サウロが諸会堂に隠棲していると見られる「主の弟子たち」を見つけ出しエルサレムに連行するためにダマスコに向かった途上で経験したとされる幻視体験として描かれる。実際に起こっている出来事は、旅の途上で倒れ、目が見えなくなってしまうサウロが、ダマスコに住む「主の弟子」であるアナニアらに受け入れられ、癒され、回復し、結果として「主の弟子」となる「洗礼」を受けた、ということである。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスが福音宣教を開始され、最初の弟子たちを従わせられたことを伝える箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で共通する伝承物語だが、ルカは独自の伝承を加えており、また「ヨハネ福音書」はまったく異なる伝承に基づいて伝えている。おそらく、同時に登場する四人の漁師たちの内の誰が証言したことに基づくものであるかによって、異なる伝承が受け継がれたのだろう。

・主イエスの福音宣教活動は、「マルコ」および「マタイ」によれば、「ヨハネが捕らえられた後」に始められたことである。これは、主イエスの福音宣教がヨハネの宣教を継承したものでありながら独自のものでもあることを示すための表現なのだろう。

・ガリラヤ湖は、当時の優良な漁場として知られており、四人の漁師らが拠点としていたカファルナウムには、水産物加工場(塩漬けや干物にする)があって、シリア方面などに流通する交易ルートが形成されていた。また、カファルナウム自体が交易上の要衝となっており、ローマ軍の駐屯地が置かれるほどであった。よって、ガリラヤ湖の漁師らは商業化された漁業従事者であって、一定の生活水準を保つ人々であったと考えられる。また、ガリラヤ地方は多くのユダヤ人が居住しており、地域ごとの会堂を中心とした伝統的なユダヤ人社会も形成されていたと考えられる。彼らには、自分たち自身の生活困窮といった問題意識はなく、主イエスに社会変革を求めて従うというような動機もなかったであろう。つまり、彼らの弟子としての歩みは、自発的な決断としてではなく、受動的な招きへの応答としてなされたのであり、そこに一つの本質がある。

来週の誕生日 (1月16日～22日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-148 番「全地よ、主に向かい」(I 4番「よろずのくにびと」、I 5番「こよなくかしこし」)は、カルヴァンの指導下でジュネーブ詩編歌に倣って作られた「英語ジュネーブ詩編歌」(~1562年)に収められた詩編 100 編の歌。I 4 番や I 5 番は、同じ詩編歌の別版(編詞者違い)。

・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩ん

だ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともいうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。

・21-505 番「歩ませてください」(曲 = I 353)は、19 世紀末米国の会衆派牧師 W.グラッドンが雑誌に掲載する宗教自由詩として創作したものが原作で、その後、グラッドンの指定した曲とのセットで讃美歌集に採用され、広く歌われるようになった。この曲は、もともと「わが魂のひかり」(21-214 番)のために作曲されたもの。

・21-24 番「たたえよ、主の民」(= I 539 番「あめつちこぞりて」)は、17 世紀英国教会司祭で讃美歌作家のトーマス・ケンが作詞した朝の歌(21-209 番)と夕の歌(21-213 番)の最終節として作詞された頌栄(小栄光唱)。曲は、16 世紀にジュネーブ詩編歌のための曲として用いられ、まもなく英語詩編歌集 100 編に付されて広く知られるようになった曲。

21-148「全地よ、主に向かい」

GENEVAN 100 (OLD 100TH)

1. All people that on earth do dwell, / sing to the Lord with cheerful voice; / him serve with mirth, his praise forth tell; / come ye before him and rejoice.
2. Know that the Lord is God indeed; / without our aid he did us make. / We are his folk, he doth us feed, / and for his sheep he doth us take.
3. Oh, enter then his gates with praise; / approach with joy his courts unto; / praise, laud, and bless his name always, / for it is seemly so to do.
4. For why? The Lord our God is good: / his mercy is forever sure; / his truth at all times firmly stood, / and shall from age to age endure.
5. To Father, Son, and Holy Ghost, / the God whom heav'n and earth adore, / from us and from the angel host / be praise and glory evermore.

21-505「歩ませてください」

O Master, Let Me Walk with Thee

1. O Master, let me walk with Thee / in lowly paths of service free; / tell me Thy secret; help me bear / the strain of toil, the fret of care.
2. Help me the slow of heart to move / by some clear, winning word of love; / teach me the wayward feet to stay, / and guide them in the homeward way.
3. Teach me Thy patience, still with Thee / in closer, dearer company, / in work that keeps faith sweet and strong, / in trust that triumphs over wrong.
4. In hope that sends a shining ray / far down the future's broad'ning way; / in peace that only Thou canst give, / with Thee, O Master, let me live.

21-24「たたえよ、主の民」

Praise God, from whom all blessing flow

Praise God, from whom all blessings flow; / praise him, all creatures here below; / praise him above, ye heavenly host; / praise Father, Son, and Holy Ghost. / Amen.